令和5年度　学校評価書

えびの市立真幸中学校

評価基準(数値)： 4･･･よくあてはまる(8割以上)　3･･･だいたいあてはまる(5～8割未満)　2･･･あまりあてはまらない(2～5割未満)　1･･･まったくあてはまらない(2割未満)

評価基準(記号)： A(期待以上)･･･3．5以上　B(ほぼ期待通り)･･･2．5以上　C(期待を下回る)･･･1．5以上　D(改善を要する)･･･1．5未満

項目	教育目標達成のための具体的取組		生徒	保護者	教師	学校の自己評価コメント	自己評価	関係者評価	学校関係者のコメント
未来につながる学力向上	主体的･対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実践 ICT教材の活用	3.1	3.0	2.9	教師は「ひなたの学び」の実現に向けた授業改善に取り組んでおり、管理職等が参観する公開授業でその取組を確認している。タブレットを授業で活用する場面は増えているが、「効果的な活用」について模索している状況もあるため、教師の評価が低いと考えられる。	B	B	○学力向上に向け、タブレット活用をはじめさまざまな取組をいただいております。限られた時間･単元の中で結果を出すのは容易ではありませんが、学校経営ビジョンに基づき、継続的な取組、実施をお願いします。 ○「ひなた場」が行われるなど、自身の将来への思いや学びへと発展できる取組などいいと思います。 ○英語表現科での取組においての英検取得率がすごいと思います。 ○英語教育については、かなり力が入っていると思う。 ○テスト前後の「後」について、正解の解説をしっかりと共有して、振り返ることで、苦手や理解が進まないところを強化するとどうか？ ○将来の進路については、極力、早い時期より考えることは、自分の特性を知る上でも有効と考える。キャリア教育の推進は不可欠となる。 ○理解度などがそれぞれ違う中、個々に対しての対応等が難しいと思うが、可能な範囲で対応していると思う。 ○個別最適な学びについては、家庭へのタブレット持ち帰りによる課題学習ができると望ましい。 ○生涯学習の時代と言われる。学ぶことの意義を身につけさせてほしい。 ○活字離れが指摘される今日、読書の重要性を含め、タブレット使用の「功罪」についても検討の余地があると思う。
	各種テストの積極的な活用による基礎･基本の徹底	「振り返り」と「確認」を意識した学習内容の定着	3.1	2.7	3.3	学校は、定期テスト以外にも小テストや単元末テスト等を実施して学びの確認を行い、誤答傾向等を事後の指導に生かすようにしている。また、それらを通して学びの確認ができていると答えた生徒が多い。保護者の意見から、テスト前後の家庭学習の取組に課題があるといえる。			
	小学校と連携した学習習慣の定着や一貫性のある学力向上策の推進	「小中合同研修会」の充実 日常的な情報の共有	2.8	2.8	2.5	年間3回の小中合同研修会や担当者同士の日常的な情報交換を実施して、小中一貫した教育が進められるようにしている。やや取組にマンネリ化が見受けられるので、「今連携が必要な取組は何か」という視点で連携の在り方やや研修内容を考えていきたい。			
	英語表現科	英語表現科による外国語能力の向上	3.1	2.8	3.1	英語表現科ではALTとのTTにより、外国語能力の向上を図っている。3年生の英語検定取得率が、1月末時点で準2級8%、3級42%であり、文部科学省が提示している「3級以上50%」を達成している。			
対話を意識した心の教育	多面的で総合的な生徒理解に基づいた積極的な生徒指導	全職員と家庭･地域の協力による生徒の適性に配慮した指導	3.3	3.0	2.9	生徒は、一人一人の適性に配慮した指導が行われていると考えている割合が高い。特別な配慮や支援を必要とする生徒についての教師の共通理解や個別の指導計画の活用をもう少し図っていきたい。	B	B	○家庭、学校、地域が共通の認識をもって生徒の健全育成に関わっていくことが大切であると思う。三者の情報共有･連携を今後も図っていけたらと思う。 ○近所の生徒さんが、認知症の老人とよく話をしている姿を見かけます。感心させられます。優しい心遣いがすごいです。 ○30人学級で、丁寧に対応がなされていると思う。 ○今日の社会はイライラ感や孤立感が増し、生きにくい社会となっている。いじめや不登校、家に居場所のない若者が「苦痛」から解放されるため、薬物に手を出すケースも多い。思春期で心情が大きく揺らぐときです。生徒の発信している「シグナル」を的確に捉えることが大切と思う。 ○職員全体で生徒が困っていること等に対して情報を共有しているようで、良いと思う。
	計画的で組織的な教育相談の実施による居心地のよい学校づくり	いじめ、不登校、非行等の早期発見･即時対応を目指した体制づくり	3.2	2.9	3.4	毎月実施するいじめアンケートや毎週行う生徒理解、年に3回実施する教育相談で、生徒の悩み等の早期発見や職員の共通理解を行っている。また、職員一人ではなく組織的な対応を行うと共に、気になることは家庭に連絡をして、連携して取り組むようにしている。			
	SDGsを意識し、地域と連携した環境教育の実践	積極的な4R活動など循環型社会実現のための取組 情報の発信	2.8	2.9	2.6	専門家を招聘してのSDGsに関する講演会や家庭教育学級における4R活動についての講座などを行ってきた。生徒会と連携して活動を行ったが、期間限定であり、日常における啓発が不十分であった。			
命を守る意識と健康教育	日常生活における運動習慣作りや部活動の充実による体力･運動能力の向上	生涯スポーツとしての運動体験の提供 人格形成の場としての部活動の取組	3.4	3.1	2.6	保護者や生徒と教師の意識の差が大きい。校内での部活動は部員不足が続き、活動が困難な状況が続いている。校内部活動の今後の在り方を考えると共に、えびの市の拠点校部活動や社会体育と連携していくことが必要である。	B	B	○災害の多い日本にあって、いかに自らの命を守るということを常日頃からの訓練等を通じて養っておくことは大事なことと思います。 ○防災教育などきちんと取組をされており、家庭に広げることが課題とあるが、確かにそう思う。しかし、企業なども他人事ではない意識があり、それぞれ計画されているようなので、家庭で色々話しあった結果などの課題とかあると、もっと身近に感じるのではないかと思います。 ○昨今、自然災害が多発し、命の危険も増している。防災意識の向上を図り、危機管理能力を高める指導を徹底してほしい。 ○多様化や複雑化が進展する社会を生き抜く力を身につけるには、「心身」の健全な発達が不可欠である。そのためには、家庭･学校･地域社会の連携が必要である。 ○学校だけの課題ではなくて、市全体での直面している課題。文化部は市が文化センターを拠点に地域活動するべきではないか。 ○部活動の部員不足問題はこれからも厳しくなると思う。体育系だけではなく文化系もやはり必要と思う。
	計画的な防災教育や交通マナーの定着による命を守るための危機管理能力の向上	地域の実態を知り、対処方法を習得することによる命を守る意識の定着	3.5	2.5	3.0	学校ので避難訓練や防災学習は計画的に実施しており、特に生徒の評価が高い。生徒自身は危機管理意識の高まりを感じているが、家庭に広げることが課題である。地域や家庭を巻き込んだ防災学習を検討していきたい。			
	新しい生活様式を意識し、家庭と連携した、心身の健康を保持増進する取組。	日常的な健康管理意識の向上 規則正しい生活習慣の定着	3.2	3.1	2.7	保健だより等を活用して学校と家庭が連携した健康教育を行うことで、生徒や保護者はほぼ満足しているという結果であった。生活習慣について、教師と保護者･生徒の考えにずれがあるので、今後PTAとも連携して改善を図りたい。			
働き方改革	業務内容と分担の見直しや効率化と部活動の活動時間･休養日の遵守を徹底し、時間外勤務時間の月45時間以内の推進。				3.2	ICTを活用した業務改善が進み、時間外業務時間は確実に減っている。また、部活動の休養日の設定もほぼ守られている。職員の働き方に対する意識の変化も現れており、特に後半になるにつれて時間外業務月45時間未満の割合が増えている。ただ、学級減に伴う担当授業時数の減少も大きな要因であり、次年度以降、学級増となった場合、更なる業務改善が必要である。	B	B	○先生方の仕事が多く、帰宅も遅くなっているようで、働き方改革を進めてください。 ○社会問題化した教員の時間外勤務については、「職業の特殊性」で片付ける時代ではない。業務の効率化がカギとなる。 ○時間外業務が減ることは良いことだと思う。えびの独自の30人学級のおかげでゆったりとクラス活動ができているのかもしれないが、負担が増えるのであれば見直す必要もあると思う。